動態助詞“～着”の用法について

高　橋　弥守彦

A Study of Aspect “～*Zhe*”

Yasuhiko TAKAHASHI

内容提要

句子可以分为一般句型和特殊句型。一般认为，动态助词“着”在一般句型里表示继续。表示继续的动态助词“着”在语言环境里表示事件的进行和持续。

笔者分析一般句型里的动态助词“着”还是跟一般的看法一样表示继续，但在语言环境里表示事件的进行、持续和关系。表示事件进行的还可以分为主体的进行和事情的进行。表示事件持续的还可以分为主体的持续和事情的持续。表示事件关系的还可以分为主体和客体的关系和事情的关系。

特殊句子里有两个以上的事件，每个事件里可以用表示继续的动态助词“着”，这个动态助词“着”跟一般句型的动态助词“着”一样表示事件的进行、持续和关系。表示事件进行的也还可以分为主体的进行和事情的进行。表示事件持续的也还可以分为主体的持续和事情的持续。表示事件关系的也还可以分为主体和客体的关系和事情的关系。

目次

1. はじめに
2. 先行研究に見られる動態助詞“着”
3. “跟”の用法
4. 動態助詞“着”の再分類
5. おわりに

1. はじめに

一般に動態助詞“着”は継続を表し[1)]、連語レベルの言語環境により、動態助詞“着”の表す継続が進行と持続の二類に分かれる[2)]。『中国語用例辞典』（以下『八』と略称する）では、動態助詞“着”を動作の進行と状態の持続とに分けているが、これは連語レベルのなかでの動態助詞“着”の果たす役割であり、動態助詞“着”の機能を述べているのではない。筆者のこの観点に基づけば、『八』の動態

助詞“着”と連語レベルのなかでの動態助詞“着”の果たす役割は次のように図表化できるであろう。

[表 1] 動態助詞“着”の機能（例文も訳文も『八』p. 444 にあり）

動態助詞“着” —— 継続 ——
- 動作の進行：他们正开着会呢。
  彼らは今、会議中だ。
- 状態の持続：他穿着一身新衣服。
  彼は新しい服を着ている。

ところで、先行研究によれば、“向, 跟, 随, 顺, 沿, 对”には動詞と介詞としての用法があり、介詞（動詞）の用法として、先行研究の中では次のような例文が挙げられている。これらを見る限り、必ずしも介詞（動詞）の品詞分類が一致しているわけではない。

(1) 向着西南飞去。(『八』p. 373、『小』p. 1585、《侯》p. 597・介詞)
西安に向かって飛んで行く。(『八』p. 373・介詞)

(2) 我跟着那位老师学过汉语。(『小』p. 467・動詞 / 《侯》p. 227・介詞)
あの先生に中国語を教わったことがある。(『小』p. 467・動詞)

(3) 他们已经随（着）部队转移了。(『八』p. 332、『小』p. 1372・動詞 / 《侯》p. 532・介詞)
彼らはもう部隊について移動した。(『八』p. 332・動詞)

(4) 雨水顺着帽沿直流。(『八』p. 325、『小』p. 1344、《侯》p. 524・介詞)
雨水が帽子のヘリからしたたる。(『八』p. 325・介詞)

(5) 最近我们沿着成昆铁路旅行了一趟。(『八』p. 383、『小』p. 1678、《侯》p. 608・介詞)
最近ぼくたちは成昆鉄道沿線を旅行した。(『八』p. 383・介詞)

(6) 小黄对（着）我笑了笑。(『八』p. 92、『小』p. 353、《侯》p. 172・介詞)
黄くんはわたしに笑いかけた。(『八』p. 92、・介詞)

上掲の例文はいずれも“向, 跟, 随, 顺, 沿, 对”の後に動態助詞“着”が用いられている例である。一般に動態助詞“着”は動詞の後に用いられるが[3]、上掲の“向, 跟, 随, 顺, 沿, 对”は、その後に動態助詞“着”が用いられているのにもかかわらず、先行研究では“跟, 随”だけが動詞と介詞とする説に分かれ、他はすべて介詞としているので、研究者の間でも、これらを介詞とする説が多い、と言える。

筆者は品詞分類の基準を単語の有する意味と文法的なふるまいとに置いている。この二つの基準に基づけば、“向, 跟, 随, 顺, 沿, 对”の表す語義的な意味とその後に継続を示す動態助詞“着”が用いられているという文法的なふるまいとによって、これらはいずれも動詞と言える。すなわち、“向(着), 跟（着), 随（着), 顺（着), 沿（着), 对（着)”は「動詞＋動態助詞“着”」からなる構造と言える[4]。

動態助詞“着”は上記に示すように、一般文型（[表1] の例文）と特殊文型（例1～6）の中に用いられる。一般に二つの出来事を有する特殊文型のなかで、前の出来事は副次的な内容を表し、後の出来事は主要な内容を表す。前の出来事のなかに用いる“跟（着），随（着），顺（着），沿（着）”は、単独または客体とともに主体の「副次的な運動の進行」を表し、“对（着）”は主体の「副次的な運動の持続」を表す[5)]。前の出来事に対し、後の出来事は主体の「主要な運動の進行と持続」とを表す。

上記の説によれば、動態助詞“着”の機能は一般文型と特殊文型の中で運動の継続を表し、言語環境により出来事内部の運動の進行と状態の持続との二類に分かれる。本稿では継続を表す動態助詞“着”の用いられている文と文中の位置とを再分類･再整理し動詞と介詞を明確に区分する。

2. 先行研究に見られる動態助詞

『八』《侯》によれば、動態助詞“着”には次のような用法がある。なお、《张》は動態助詞を時態助詞と言っている。

2. 1. 動態助詞“着”にたいする『八』の分類

『八』では動態助詞“着”の用法を次の六類に分類している。

i. 動作の進行――動詞の前に副詞“正，在，正在”を付けられる。

(7) 人们跳着，唱着。(『八』p. 444)

人々は踊ったり歌ったりしている。(同上)

ii. 状態の持続――動詞･形容詞の前に副詞“正，在，正在”を付けられない。

(8) 门开着呢。(『八』p. 444)

ドアがあいている。(同上)

iii. 存在文――どのような状態・姿で存在しているかを表す。

(9) 门口围着一群人。(『八』p. 444)

門口を大勢の人が囲んでいる。(同上)

(10) 墙上挂着一幅水墨画。(『八』p. 444)

壁に水墨画が一枚かかっている。(同上)

iv. 連動式――二つの出来事の関係を表す。

(11) 说着看了我一眼。(『八』p. 444) ――二つの動作の同時進行

言いながら私をちらっと見た。(同上)

(12) 这碗菜留着给爸爸吃。(『八』p. 445) ――手段と目的

この料理はお父さんのために残しておく。(同上)

(13) 说着玩儿。(『八』p. 445) ――慣用句

冗談を言う。(同上)

(14) 说着说着不觉到了门口了。(『八』p. 445) ——前の動作の進行中に後の動作が現れる。

話をしているうちに、いつの間にか入口に来ていた。(同上)

v. 形容詞 + “着” + 数量詞

(15) 穿在身上短着一大截。(『八』p. 445)

着てみるとかなり短い。(同上)

vi. 動詞 / 形容詞 + “着” + “点儿”

(16) 过马路看着点儿。(『八』p. 445)

大通りを横切るときは注意しなさい。(同上)

(17) 慢着点儿，别摔了！(『八』p. 445)

気をつけなさい、ころばないように。(同上)

上掲の例文を見ると、動態助詞“着”に対する『八』の分類は機能(i, ii)と文の種類(iii)と構造(iv, v, vi)とを並列的に分類しているようである。この分類は動態助詞“着”の分類とはいいにくいのではないだろうか。動態助詞“着”の分類基準を段階的に分け、基準を統一するほうがよいであろう。

2. 2. 動態助詞“着”にたいする《侯》の分類

《侯》は動態助詞“着”について、前提として機能の面から進行と持続の二類に分け、さらにそれらを九類に下位分類している。

i. 進行

(18) 等会儿，我洗着头呢。(《侯》p. 736)

ちょっと待って、頭を洗っているので。(筆者訳)

ii. 持続(動詞 / 形容詞 + “着”)

(19) 阳台上站着几个人。(《侯》p. 736)

ベランダに人が何人か立っている。(筆者訳)

(20) 锅里热着粥呢。(《侯》p. 736)

なべの中でお粥を温めています。(筆者訳)

iii. 連動式の第一動詞 / 形容詞 + “着”

(21) 顶着太阳下地。(《侯》p. 736)

照りつける太陽のもと、仕事に行く。/ 照りつける太陽のもとで野良仕事をする。(筆者訳)

(22) 忙着去参加考试。(《侯》p. 737)

急いで試験を受けに行く。(筆者訳)

iv. 形容詞 + “着” + 数量詞

(23) 我比你大着四岁。(《侯》p. 738)

わたしはあなたより4歳も年上です。(筆者訳)

v．命令文

(24) 你站着！(《侯》p. 738)

立っていなさい。(筆者訳)

vi．“着”を一音節の単語の後に用いての二音節化

(25) 疾病的危险性随（着）年龄的增大而加大。(《侯》p. 533)

病気になる可能性は年とともに高くなる。(筆者訳)

vii．肯定式と否定式（進行と持続）

(26) 正在下着雨呢。/ 没下雨。(《侯》p. 738)

ちょうど雨が降っています。/ 雨が降っていません。(筆者訳)

(27) 他戴着一顶新帽子。/ 他没戴（着）新帽子。(《侯》p. 738)

彼は新しい帽子をかぶっています。/ 彼は新しい帽子をかぶっていません。(筆者訳)

viii．“着”をとらない動詞[6)]

(28) 他经常帮助生活困难的人。(『小』p. 45)

彼はよく生活に困った人を援助する。(同上)

ix．“了，过”をとらずに、“着”しかとらない動詞

(29) 向着他瞧了半天。(《侯》p. 738)[7)]

彼を長いこと見つめていた。(筆者訳)

上掲の例文を見ると、動態助詞“着”に対する《侯》の分類は、前提が機能からの分類としているので、機能から分類しているように思えるが、必ずしもそうではないようである。具体的に言えば、動態助詞“着”に対する《侯》の分類は機能（i，ii）と構造（iii, iv）と文の種類（v）と注意点（vi, vii, viii, ix）とを並列的に分類しているようである。やはり動態助詞“着”の分類基準を段階的に分け、基準を統一し、“着”の用法と注意点とを分けるほうがよいであろう。

2．3．動態助詞“着”にたいする《张》の分類

《张》では本稿で言う動態助詞“着”を時態助詞といい、「動詞や形容詞の後に用い、時態を表す」(p. 702）と定義し、次の3用法を挙げている。

i．時間軸上で発話時と発話前の過去と現在を含む已然を表す。

1) 動態、すなわち動作の持続を表す。二音節動詞の前にはよく“正在”を用い、一音節動詞の前にはよく“正”または“在”を用いる。

(30) 大家（正在）议论着新来的厂长。(《张》p. 702)

みんなは新しく来た工場長のことについて話している。(筆者訳)

2) 静態、すなわち状態の持続を表す。動詞の前には“已经”を加えることができるが、“正在”“正”“在”は加えることができない。[8)]

(31) 他（已经）在床上躺着。(《张》p. 702)

彼はもうベッドに横になっています。(筆者訳)

ii. 命令文に用いる。時間軸上では未然に属す。

(32) 你听着！(《张》p. 703)

話を聞いていなさい！(筆者訳)

iii. 相対的な時間を表し、已然や未然を表す文に用いることができる。

1) 同じ時間を表す。前の動詞は“着”を伴い、後の動作の方式や手段を表す。

(33) 我俩（昨天 / 今天 / 明天）举着队旗入场。(《张》p. 703)

私たち二人は（昨日 / 今日 / 明日）隊の旗を持って入場した / します。(筆者訳)

2) 長くない時間を表す。前の動詞は連用して、共に“着”を伴う。後の動作は前の動作に続いて、ある状況が発生することを表す。

(34) 他说着说着就哭起来了。(《张》p. 703)

彼は話しているうちに泣き出した。(筆者訳)

3) 異なる時間を表す。前の動詞は“着”を伴い、行為の方式を表し、時間軸上は後の動作に先んじる。

(35) 这东西炒着吃。(《张》p. 703)

これは炒めて食べます。(筆者訳)

《张》では助詞“着”を時態助詞とみなし、時間軸上で発生する出来事との関係で助詞“着”を捉えている。《张》はこの点では一貫しているが、出来事の中で助詞“着”を捉えようとしているので、助詞“着”が単語レベルのものなのか、連語レベルのものなのか、二つ以上の連語レベルのものなのかが曖昧である。

もの・ひと・ことの存在と活動はすべて時間と場所から切り離せるものではない。しかし、品詞分類上の助詞“着”は、機能的にある運動の発生から終了までの一局面を表すだけであり、時間軸上で捉えるものではない。それゆえ、助詞“着”は一般に動態助詞と言い、筆者もそれに倣い時態助詞ではなく動態助詞と言っている。

なお、動態助詞“着”には、『八』《侯》《张》でとりあげられていない次のような構造からの分類もある[9]。

動詞＋“着”＋形容詞

(36) 说着容易，做着难。

言うはやすく、行なうはかたし。

3. “跟”の用法

“跟”は文中で色々な働きをするので、一般には動詞・介詞・連詞の三類の品詞に分けられている。先行研究では“跟”について、次のような例文をあげて動詞と介詞と連詞とを区分している。

(37) 你走慢一点，快了老太太跟不上。(『八』p. 128:“跟”は動詞)

君少しゆっくり歩きたまえ、速いとおばあさんがついて行けないよ。(同上)

(38) 陈叔叔在前边走，小华在后面跟着。(『八』p. 128:“跟”は動詞)

陳おじさんが前を歩き、華さんが後にしたがっている。(同上)

陳おじさんが前を歩き、華さんが後について歩いている。(筆者訳)

(39) 我跟（着）你去学校。(作例：“跟”は動詞)

私は君のあとについて学校に行きます。(筆者訳)

(40) 小车后跟着一辆大轿车。(《侯》p. 228:“跟”は動詞)

小型乗用車の後に大型乗用車がついて走っている。(筆者訳)

(41) 要尽快跟厂里汇报。(『八』p. 128:“跟”は介詞)

できるだけ早く工場当局に報告しなければならない。(同上)

(42) 这本书你跟谁借的？(『八』p. 128:“跟”は介詞)

この本、誰に借りたの？(同上) / この本、誰から借りたの？(筆者訳)

(43) 我跟你一起去。(『八』p. 128:“跟”は介詞)

君と一緒に行く。(同上)

(44) 这种萝卜跟梨一样甜。(『八』p. 128:“跟”は介詞)

このダイコンは梨のように甘い。(同上)

(45) 他跟这事没关系。(『八』p. 128:“跟”は介詞)

彼はこの事と無関係だ。(同上)

(46) 我们跟这家公司成交了。(《侯》p. 227:“跟”は介詞)

私たちはこの会社と成約した。(筆者訳)

(47) 小李跟我都是山西人。(『八』p. 128:“跟”は連詞)

李さんも僕も山西省の者です。(同上)

(48) 这个东西跟那个东西一样。(作例)

これはあれと同じです。(筆者訳：“跟”が介詞の場合)

これとあれとは同じです。(筆者訳：“跟”が連詞の場合)

(49) 我们跟他们和解了。(作例)

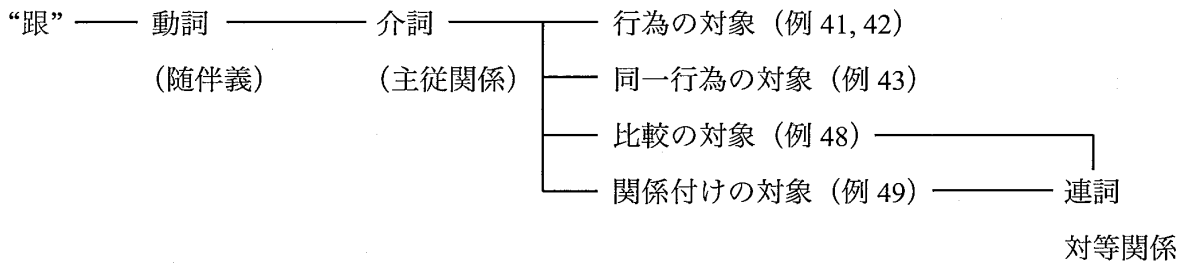
私たちは彼らと和解した。(筆者訳：“跟”が介詞の場合)

私たちと彼らとは和解した。(筆者訳：“跟”が連詞の場合)

“跟”について、『八』《侯》では例（37）から（40）までを動詞、例（41）から（46）までを介詞、例（47）を連詞として認めている。上掲の例文から、動詞としての“跟”は「あとにつく」（例 37 ～ 40）の意味で、単独では用いられず、必ず文法的な制約[10]をうけるようである。動詞“跟”は随伴義を有し、“前次后主（NP1 が従で NP2 が主）”の関係[11]を示しているという説がある。筆者の分析によれば、動詞“跟”

は各例文に見られるように、たしかに随伴義は有しているが、例（40）のNP1とNP2の位置関係（前主後従）に見られるように、“前次后主（NP1が従でNP2が主）”の関係だけではないようである。介詞“跟”には随伴義がなくなり、派生義としての主従関係が生じる。介詞としての“跟”は行為の対象「…に対して」（例41）、「…のところから」（例42）、同一行為の対象「…とともに」（例43）、比較の対象（例44）、関係付けの対象「…と」（例45，46）[12]の四類を示す標識[13]と言えるであろう。連詞としての“跟”は対等関係（例47）を示す[14]と言えるであろう。例（48）（49）は、文の展開によって、“跟”が主従関係を示せば介詞（例48は比較の対象、例49は関係付けの対象）だが、対等関係を示せば連詞となるであろう。ここには介詞から連詞に移行する過程が見られる。このうち例(43)“我跟你一起去。”を“我跟着你一起去。”と言えば、この“跟”は随伴義の意味を有しているので動詞となり、随伴義の意味を有さない例（43）の“跟”とは品詞分類上で明らかに一線をかくす。すなわち、“跟”が随伴義を有していれば動詞であり、有していなければ介詞と連詞と言え、両者は主従関係であれば介詞であり、対等関係であれば連詞と言えるであろう。これらの関係は次のように図示できるであろう。

［表2］“跟”の用法



連語論の観点から見れば、出来事の示す「連語のむすびつき」の意味関係から、“跟”に随伴義があれば動詞、なければ介詞と連詞とである。介詞の場合、一方が主、もう一方が従を示す「行為の対象」「比較の対象」「同一行為の対象」から「関係付けの対象」を示す標識へと派生し、それがさらに発展すると、「対等関係」を示す連詞としての用法へと派生していったという一連の過程が上掲の例文と［表2］から見られるであろう。ところが、筆者のいう「副次的な運動を表す“跟（着）”」の“跟”に対しては、筆者は動詞とみなしているが[15]、既述のように先行研究では動詞と介詞とする二説があり、介詞とする説のほうがやや優勢のようである。ここで再検討してみよう。

(50) 于是，男人跟着女人回家。(9-2-87)

男はだまって立ち上がると、女の後について行った。(9-2-86)

(51) 大家都笑，我也跟着笑。(8-7-87)

みんなは大笑いし、僕もつられて笑った。(同上)

(52) 萍的善意驱走了我心中的不快，我也跟着站了起来，拉着盲人的衣服说：“来，你坐下吧！”(8-12-85)

萍の優しさに不快感を吹き飛ばされた僕は、彼女に続いて席を立つと盲人の袖を軽く引っ張って言った。「どうぞお座り下さい」(8-12-84)

(53) 这里的球衫式样可真不少，花色也多，可麻烦也跟着来了。(2-8-101)

この店の品数の多いこと、色もとりどり、却ってめんどうになってきた。(同上)

(54) 深夜了，她一个人背着丈夫去医院。儿子不敢呆家里，好害怕，于是跟了去。(8-3-87)

よる遅く、彼女は女一人の力で、夫を背負い、病院に行こうとしたが、子供が一人で家に残るのを怖がってどうしても後についてくる。(8-3-86)

(55) 哥几个跟了我三天了，挺辛苦的吧！(《连城诀》第 32 集)

皆さん私に三日ついてきて、大変だったでしょう。(筆者訳)

(56) 过了一会儿，我到两节车厢交接处的门廊去站站，他也跟过来。(《插队的故事》)

しばらくして私が車両の連絡通路へ行って立っていると、彼もやってきた。(同上)

(57) 10 岁的儿子跟在他屁股后面。(6-5-93)

十歳になる息子が、そのうしろについています。(6-5-92)

例（50）から（57）までの“跟”はいずれも「あとにつく」の意味であり、随伴義を示している。単語の表す意味の上からは動詞と言えよう。次に文法的なふるまいの点から“跟”をみてみよう。先行研究で言うように“跟着”が仮に介詞であるならば、例（50）の“跟着女人回家”のように、“跟着”の後に必ず名詞“女人”が用いられていなければならない。しかし、例（51）（52）（53）の“跟着”は“跟着笑”“跟着站了起来”“跟着来了”のように、“跟着”の後には動詞“笑,来”または動詞連語“站了起来”が用いられ名詞が用いられていない。この言語事実からすると、“跟着”は介詞とは言えなく、「動詞“跟”＋動態助詞“着”」とみなすほうが言語事実に即していると言えそうである。“跟”が動詞であれば、例（54）の“跟了去”、例（55）の“跟了我三天了”、例（56）の“跟过来”、例（57）の“跟在他屁股后面”の表現も納得がいく。すなわち、“跟着”は動詞でもなく介詞でもなく、「動詞“跟”＋動態助詞“着”」である。“跟”が動詞なので、例（50）から（55）のように、その後に動態助詞の“着,了”が用いられ、例（56）のように、その後に位置移動の動詞“过”と趨向移動の動詞“来”とが用いられ、例（57）のように、その後に動詞“在”が用いられる、と言えるのであろう。

以上の文法的なふるまいの点からも“跟”は動詞と言えるであろう。なお、“跟”が「動詞“跟”＋動態助詞“着”（＋名詞）＋動詞」構造のなかに用いられていても、既述のように“跟着”の“跟”は「あとにつく」の意味であり、いずれも“跟”の基本義なので動詞と言え、言語環境により、動態助詞“着”は「主客の関係」を表している[16]、と言えるであろう。

これまで、主客の関係を表すという概念のなかった“跟着”の用法は、先行研究では《侯》の「vi. “着”を一音節の単語の後に用いての二音節化」という説が広く浸透していたようである。しかし、連語論の観点から見れば、この用法の“跟着”も随伴義を有しているので、介詞ではなく動詞と言える。

4. 動態助詞“着”の再分類

動態助詞“着”は文の展開の中でどのように現れるのであろうか。言語事実を調べると、動態助詞“着”は一般に第一発話には用いられなく、第二発話以降（第一・三段落）に用いられる。これは具体的な描写などを意味する文に用いられるということである。仮に第一発話に用いられている場合であっても数量詞（第二段落）などを文中に伴っている。文レベルの問題として取り上げるのであれば、第一発話に数量詞を伴っているということは、文の展開がすでにあったことを示しているバリエーション的な文の展開であり、プロトタイプ的な文の展開の中ではない。すなわち、この文の展開も動態助詞“着”は具体的な描写などを意味する文に用いられるということである。たとえば具体的には次のように用いられる 。

他们请客人到屋里坐。屋子的门和窗户都开着，屋子里很干净，也很整齐。

外边的屋子里，中间放着一张桌子。桌子两边有几把椅子。桌子上放着电视机。

里边是王国华和他爱人住的屋子。墙上挂着几张画儿和七、八张照片。床的左边是桌子，右边是一个衣柜。桌子上放着收音机。床对面放着两只箱子。

（『修訂新中国語』下 p. 105-106）

動態助詞“着”は継続を示し、一般文型と特殊文型（連述文・兼語文）の中に用いられる。一般文型に用いられる動態助詞“着”は［表 1］に示されているように言語環境により、進行と持続とに分かれる、と言われている。まず、一般文型に用いられている動態助詞“着”の用法を分析し、この説の可否を検討してみよう。

4. 1. 一般文型における動態助詞“着”の再分類

本節では一般文型に用いられている動態助詞“着”の用法を分析し、従来から言われている説の可否を検討してみよう。

(58) 她的腿像灌满了铅，吃力地挪动着，去插院门，……（1-7-99）

足は鉛でもつめた感じで自由にならない。それでも、力をふりしぼって体を動かし、庭の門のかんぬきを掛けに出た。……（同上）

(59) 他手哆嗦着，蛋糕的一角落在地上。（1-4-96）

彼の手が震え、刺されたケーキが下に落ちた。（同上）

(60) 她终于倒向他的怀抱，他流着眼泪，把她紧紧搂住了。（1-12-104～105）

彼女はその胸に抱かれてしまった。涙をこぼしながら、彼はしっかり抱きしめていた。（1-12-105）

(61) 我们吃着西瓜，喝着甜粥，身心的疲劳一扫而光。（1-2-99）

スイカを食べ、甘いお粥をすすっているうち、心身の疲れはどこかにふっ飛んでしまった。（同上）

(62) 王力木然地站着。（1-1-96）

王力はぼそっとつっ立ている。(同上)

(63) 他把双手背过去，风雨衣的扣子全开着，被风吹得掀起一个角。(2 - 4 - 101)

所長が後手にすると、ダスターコートの前がはだけて、折からの風にコートの裾が舞いあがった。(2-4-102)

(64) 又过了两天，西屯人又来了，领了个小伙子，扛着锹。(2-3-99)

二日後、男がまたやって来た。若い者を従え、スコップをかついでいる。(同上)

(65) 再看看我家脸盆里，却用冷水冰着一个大西瓜！(1-2-99)

わが家の洗面器を見ると、冷たい水に大きなスイカが冷やしてある。(同上)

(66) 任何人跟他交谈时，怪味都在伴随着他。(1-10-94)

誰と話しているときでも、ニオイはつきまとった。(同上)

(67) 她才轻声地向着王力："对不起，我不该提问你的。能原谅我吗？"(1-1-96)

ようやく彼女は、王力に小さな声で話しかけた。「ごめんなさい、あなたに質問すべきじゃなかったわ。ゆるしてくれる」(同上)

(68) 靠着信息灵通，我们的餐桌上就显得格外丰盛了。(1-2-98)

我が家の食卓が格別にぎわうのは、発達したこの「情報網」のおかげである。(1-2-99)

(69) 连着三天了，妻子六点半起床，丈夫就开门而入，一分不差。(1-1-92)

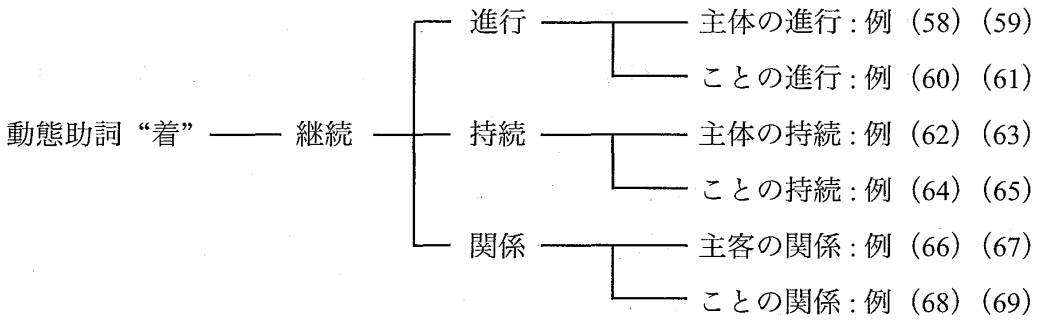
続けて三日になる。妻が六時半に起きると、すぐ夫がドアを開けて入ってくるのだ。一分の狂いもない。(1-1-93)

既述のようにこれまでの分析によれば、動態助詞"着"は継続を表し、連語レベルの言語環境により、動態助詞"着"の表す継続が「進行」と「持続」の二類に分けられる。しかし、例(58)から(68)までを分析すると、"着"は連語レベルの言語環境では進行と持続のほかにも他の機能があるようである。

進行は主体の移動(例 58)と主体の動きはあるが移動のない運動(例 59)とに分けられる。ことの進行は出来事内部の客体の移動(例 60)と出来事の動きはあるが移動のない運動(例 61)とに分けられる。持続は主体の意志による運動の持続(例 62)と運動の結果の持続(例 63)とに分けられる。ことの持続は主体の意志による客体の運動の持続(例 64)と主体の行う出来事内部における運動の結果の持続(例 65)とに分けられる。例(66)から(68)までの動態助詞"着"は言語環境から主体と客体の関係および主体と客体とが作る出来事の関係を表している。本稿ではこれを「関係」と言う。主客の関係は主体と客体との関係であり、客体に対する主体の随伴の関係(例 66)や客体に対する主体の持続の関係(例 67)などに分けられる。ことの関係は主体の意志により客体に対して行う出来事の持続の関係(例 68)や出来事の結果の関係(例 69)などに分けられる。

以上の分析によれば、一般文型に用いられる動態助詞"着"は、主体自体の運動と関わるか主体の行う出来事と関わるかによって、[表 3]が作れるであろう。

［表 3］一般文型における動態助詞“着”の用法



4．2．特殊文型（～1着＋～2）における動態助詞“着”の再分類

ここで言う特殊文型とは一つの文中に主体が一つで、主体の行う出来事が二つ以上ある文を言う。一般には主体の行う出来事は二つである。出来事が二つの場合は、文意からみると、前の出来事が副次的であり、後の出来事が主要な内容である。本節では二つの出来事を有する特殊文型における前の出来事の中に用いられている動態助詞“着”の用法を分析し、従来から『八』《侯》などで言われている「連動式に用いる」と、《张》などで言われている「相対的な時間を表す」という説の可否を検討してみよう。

(70) 当她看到我身后的王力甩着一条残废腿，蹒跚着艰难地跨进门时，她目瞪口呆，无比震惊。(1-1-95)

王力は僕の後から、びっこを引き、よろけながらつらそうに入ってくる。彼女はぽかんとしている。たまげたようだった。(1-1-96)

(71) 丈夫拿过洁的背包，里外翻了半天，愣住了，双唇哆嗦着问洁：“信呢？”(8-1-87)

夫は潔のバッグを取り上げるとしばらく中をさがしていたが、突然顔色を変え、唇を震わせながら潔に聞いた。「手紙を知らないか？」(同上)

(72) 胖嫂挤进门去，神秘地凑着张大妈的耳朵说：“你家可还有肥皂？”(2-9-99)

ふとっちょおばさんは、戸の隙間から中に入り、張おばさんの耳元に近づいて、そっとささやいた。「あんたんところに、まだ石けんあるかい？」(同上)

(73) “妈妈，猫已经找回来了，您怎么还哭啊？”我摇着妈妈的手说。(2-8-100)

「お母さん、猫がみつかったのに、どうして泣くの？」ボクは母の手をゆすりました。(同上)

(74) 首先是小车司机，一把手不坐车，二把手三把手坐着脸红，慢慢也不坐了。(1-10-95)

筆頭は運転手だ。局長は車に乗らない。副局長二人は乗っても、後めたいのか顔を赤くする。そのうち、二人も乗ることはなくなった。(同上)

(75) 窗户开着不好。(作例)

窓があいていてよくない。(筆者訳)

(76) 爹死后，妈抱着他常流泪，不知该怎么生活下去。(2-7-98)

父の死後、母は安安を抱いて、どうやって暮らしたものやらと、いつも涙を流した。(同上)

(77) ……，“多纳”说大家穿着国旗色比赛，有意义。(2-8-101)

……。ドナは、国旗の色を着て試合をするのは有意義だ、といった。(2-8-102)

(78) 她抬头望向挂钟，时针向着十点转去，转动的针又化成舞池里流动的人……(2-12-103)

彼女は頭をもたげて柱時計を見た。針は十一時に近づくところだ。その動く針が、ホールにうごめく人のように見える……。(同上)

(79) 我应声跑进厨房，一下给吓住了，妈妈正愣愣地对着小猫掉眼泪！(2-8-100)

台所へ走って行って、びっくりしました。母は子猫と向かい合って涙を流しているのです。(同上)

(80) 他给她看看表，仗着有伞遮掩大胆地吻了吻她的前额。(4-8-97)

彼は時計を彼女に見せると、かさが自分たちをかくしているので、思い切って彼女の額に軽く唇をあてた。(同上)

(81) 瓜拿到手，他只要托在手心上，用手轻轻一拍，凭着这一拍瓜的震动传送到手心上的微妙感觉，他就能说出瓜的成色来。(6-9-93)

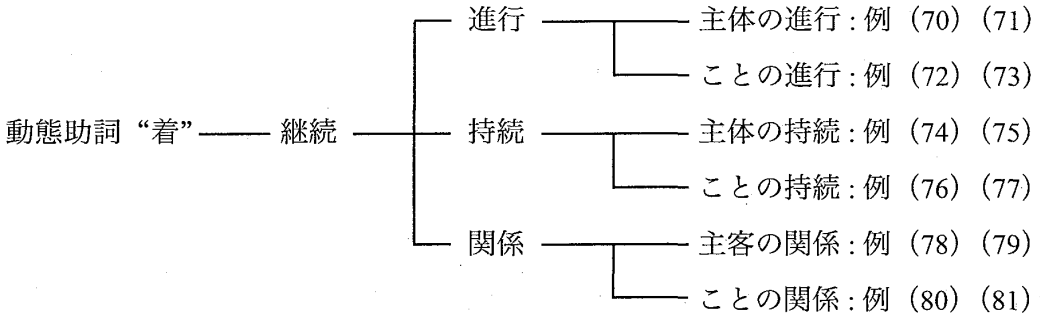
手にしたスイカを、彼はチョンチョンとたたく。その振動が手のひらに伝える微妙な感覚によって、スイカのよしあしを言い当てることができるのだ。(6-9-92)

例（70）から（80）までの特殊文型における前の出来事は文中で副次的な内容を表し、前の出来事のなかに用いられる動態助詞“着”は運動の継続を表している。特殊文型における動態助詞“着”は従来、「連動式に用いる」と「相対的な時間を表す」と言われている。しかし、これは前者が文構造の問題であり、後者は前の出来事と後の出来事の時間的な関係から言っただけに過ぎなく、動態助詞“着”の機能を言っているのではない。特殊文型の前の出来事に用いられる動態助詞“着”は、筆者の分析によれば、一般文型の場合と同じように継続を表し、連語レベルの言語環境により、動態助詞“着”の表す継続が「進行」「持続」「関係」の三類に分けられる、と言える。

進行は「主体の進行」と「ことの進行」とに分けられる。主体の進行は主体の移動（例 70）と主体の動きはあるが移動のない運動（例 71）とに分けられる。ことの進行は出来事内部の客体の移動（例 72）と出来事の動きはあるが移動のない運動（例 73）とに分けられる。持続は「主体の持続」と「ことの持続」とに分けられる。主体の持続は主体の意志による運動の持続（例 74）と運動の結果の持続（例 75）とに分けられる。ことの持続は主体の意志による客体の運動の持続（例 76）と主体の行う出来事内部における運動の結果の持続（例 77）とに分けられる。関係は「主客の関係」と「ことの関係」とに分けられる。主客の関係は主体と客体との関係であり、客体に対する主体の位置移動の関係（例 78）や客体に対する主体の持続の関係（例 79）などに分けられる。ことの関係は客体に対する主体の意志により行う出来事の持続の関係（例 80）や出来事の結果の関係（例 81）などに分けられる。

以上の分析によれば、特殊文型の前の出来事は後の出来事に対して文中で副次的な内容を表し、前の出来事のなかに用いられる動態助詞“着”は、主体自体の運動と関わるか、主体の行う出来事と関わるかによって、[表 4] が作れるであろう。

［表 4］特殊文型（～ 1 着 + ～ 2）における動態助詞“着”の用法



前の出来事に動態助詞“着”を用いる特殊文型の中には、例（14）の“说着说着不觉到了门口了”や例（34）の“说着说着就哭起来了”などのように、同一の動詞と動態助詞“着”とをくりかえす用法もある。これも出来事としてみれば一つなので、特例として扱い副次的な運動に動態助詞“着”を用いる本構造の中に入れてよいであろう。なお、この類の動態助詞“着”は出来事と共に主体の進行を表す用法である。次の例文は文構造が若干異なるが、用法は同じなので同様に扱ってよいであろう。

(82) 看着看着头一低，眼睛越发湿了，饭也吃不下去了。(2-6-100)

だんだん顔が上げられなくなり、目がうるんできて、もう食べられない。(同上)

例（82）は同一動詞と動態助詞“着”とをくりかえし、一つの運動が行なわれているうちにもう一つの運動が現れてくる場合に用いる動態助詞“着”の用法とみなせるであろう。そうであれば、やはり副次的な運動に動態助詞“着”を用いる本構造の用法のなかに入れてよいであろう。

本構造に用いる動態助詞“着”は［表 4］に示すとおりであり、従来の説「連動文に用いる」は連動文という文構造に用いられているという言語事実を指摘しただけであり、動態助詞“着”の用法とは言いにくいであろう。同じく「相対的な時間を表す」という説も時間軸上から離れられない二つの出来事の行われる順序を言っているのであり、動態助詞“着”の用法とは言いにくいであろう。

4．3．特殊文型（～ 1+ ～ 2 着）における動態助詞“着”の再分類

本節では二つの出来事を有する特殊文型（～ 1+ ～ 2 着）における後の出来事の中に用いられている動態助詞“着”の用法を分析し、従来から『八』《侯》などで言われている「連動式に用いる」と、《张》などで言われている「相対的な時間を表す」という説の可否も検討してみよう。

(83) 他们沿河边走着呢。(作例)

彼らは川辺を歩いている。(筆者訳)

(84) 那原本在什么贫瘠的土地上都能生长的小草，得到精心的照料，便可着劲儿长着。(2-3-102)

あれはどんな不毛な地でも小さな草になる。それが真心こもる世話をうけたのだから、タンポポは力いっぱい成長していった。(同上)

(85) 谢屋村后一里外有座大山丘，山丘东有个龙眼洞，洞上有条石缝终年滴着泉水。(6-3-93)

謝屋村から五百メートルほど後の大きな丘の東に竜眼洞という洞穴があり、その石の裂け目から泉の水が年中したたっています。(6 - 3 - 92)

(86) 工作人员一惊，紧追过去，用手叭叭拍着厕所的门，拍不开，门从里边反锁着。(2-10-99)

検札係はハッとして追いかけ、手でバンバンとドアを叩いたが開かない。カギがかかっている。(同上)

(87) 他今天没有精神一直躺着。(作例)

彼は今日元気がなくずっと横になっている。(筆者訳)

(88) 延叔端起饭碗扒拉了几口，又放下，仿佛心里有什么东西哽着。(9-12-73)

パラパラと口に運んでは、また茶碗を食卓に置く延さんの様子は、何かが心にひっかかるようである。(同上)

(89) 儿子不知什么时候站在身后捧着一套西装。(1-8-100)

いつのまにか、スーツを持って息子が彼の後に立っている。(同上)

(90) 只在像封面一样洁白的纸上，有钢笔写着的几行字——(5-2-111)

表紙と同じ真っ白い紙に、ペン書きの字が数行あった。(5-2-110)

(91) 我想回来跟着你。(《大染坊》第 8 集)

戻ってきてついていきたい。(筆者訳)

(92) 他派手下盯着我门。(作例)

彼は手下を使って我々を監視している。(筆者訳)

(93) 她过日子靠着养老金。(作例)

彼女の暮らしは年金に頼っている。(筆者訳)

(94) 我写文章凭着灵感。(作例)

私の文章はインスピレーションに頼っている。(筆者訳)

例 (83) から (94) までの特殊文型における後の出来事のなかに用いられている動態助詞“着”を分析すると、文中における主要な出来事のなかで運動の継続を表している。特殊文型における動態助詞“着”は従来、「連動式に用いる」と「相対的な時間を表す」と言われている。先行研究の例文を見ると、この説はいずれも前の出来事のなかに用いる動態助詞“着”のことについて言っている。動態助詞“着”は本節で挙げるように後の出来事のなかにも用いられるので、ここでは後の出来事に用いられている動態助詞“着”の用法を検討してみよう。

筆者の分析によれば、後の出来事に用いる動態助詞“着”は、前の出来事に用いる動態助詞“着”と同様、前者は文構造の問題であり、後者は前の出来事と後の出来事の時間的な関係から言っただけに過ぎなく、動態助詞“着”の機能を言っているのではない。一般文型の場合と同じように後の出来事に用いられる動態助詞“着”も継続を表し、連語レベルの言語環境により、動態助詞“着”の表す継続が「進行」「持続」「関係」の三類に分かれる。

進行は「主体の進行」と「ことの進行」とに分けられる。主体の進行は主体の移動（例 83）と主体の動きはあるが移動のない運動（例 84）とに分けられる。ことの進行は出来事内部の客体の移動（例 85）と出来事の動きはあるが移動のない運動（例 86）とに分けられる。持続は「主体の持続」と「ことの持続」とに分けられる。主体の持続は主体の意志による運動の持続（例 87）と運動の結果の持続（例 88）とに分けられる。ことの持続は主体の意志による客体の運動の持続（例 89）と主体の行う出来事内部における運動の結果の持続（例 90）とに分けられる。関係は「主客の関係」と「ことの関係」とに分けられる。主客の関係は主体と客体との関係であり、客体に対する主体の位置移動の関係（例 91）や客体に対する主体の持続の関係（例 92）などに分けられる。ことの関係は客体に対する主体の意志により行う出来事の持続の関係（例 93）や出来事の結果の関係（例 94）などに分けられる。

以上の分析によれば、特殊文型の後の出来事は文中で主要な内容を表し、後の出来事のなかに用いられる動態助詞“着”は、主体自体の運動と関わるか、主体の行う出来事と関わるかによって、[表 5] が作れるであろう。

[表 5] 特殊文型（～$_1$+～$_2$着）における動態助詞“着”の用法

- 動態助詞“着”
  - 継続
    - 進行
      - 主体の進行：例（83）（84）
      - ことの進行：例（85）（86）
    - 持続
      - 主体の持続：例（87）（88）
      - ことの持続：例（89）（90）
    - 関係
      - 主客の関係：例（91）（92）
      - ことの関係：例（93）（94）

本構造に用いる動態助詞“着”は［表 5］に示すとおりであり、従来の説「連動文に用いる」は連動文という文構造に用いられているという言語事実を指摘しただけであり、動態助詞“着”の用法とは言いにくいであろう。しかも、兼語文（例 85）の場合もある。同じく「相対的な時間を表す」という説も時間軸上から離れられない出来事の行われる順序を言っているのであり、動態助詞“着”の用法とは言いにくいであろう。この点は前の出来事に用いる動態助詞“着”と同じである。

4．4．特殊文型（～$_1$着＋～$_2$着）における動態助詞“着”の再分類

本節では二つの出来事を有する特殊文型（～$_1$着＋～$_2$着）における前と後の出来事のなかに用いられている二つの動態助詞“着”の用法を分析し、従来から『八』《侯》などで言われている「連動式に用いる」と、《张》などで言われている「相対的な時間を表す」という説の可否を検討してみよう。

(95) 沁沁不干，依然学着大人的样子做着一切。(2-3-101)

シンシンはきかない。大人のまねをして何でもやっている。(同上)

(96) 平平在半空扬着小胳膊格格笑着，像只小鸽子落到妈妈怀里：……（3-7-98）

小さい腕を広げてキャッキャッと笑いながら、ピンピンは小バトのようにママの腕の中におさまりました。(3-7-99)

(97) “写信也分年龄吗？”孩子不明白，歪着头望着我。(2-5-102)

「手紙も年齢別ですか？」分からないといった顔で、少年は首をかしげて私を見ている。(同上)

(98) 他站在那里等待她的答复，她的脸又红，红得非常好看，只是低着头看着桌面，一声不吱。(2-6-99)

常平はそこに立って返事を待った。鞠さんの頬がまた染まって、とても美しい。うつむいて机の上を見ているだけで、何にも言わない。(同上)

(99) 被倾在桌上、茶几上的，没喝完的顺着吸管滴着淡黄色的液汁——抢着最后一曲迪斯科。(2-12-100)

机やテーブルの上で傾き、飲み終わっていないので、ストローからこぼれる淡黄色の液体——最後のディスコだから、ジッとしていられない。(同上)

例（95）の前と後の出来事“学着大人的样子做着一切”は共に「ことの進行」を表している。例（96）の前と後の出来事“扬着小胳膊格格笑着”は前者が「ことの持続」、後者が「主体の進行」を表している。例(97)(98)の前と後の出来事“歪着头望着我”“低着头看着桌面”はいずれも「ことの持続」を表している。例（99）の前と後の出来事“顺着吸管滴着淡黄色的液汁”は前者が「主客の関係」、後者が「ことの進行」を表している。これらの言語事実を分析すると、二つの出来事を有する特殊文型（～$_1$着＋～$_2$着）に用いられている動態助詞“着”の用法は、個別的には4.2.節の前の出来事と4.3.節の後の出来事に用いられる動態助詞“着”の用法と同じで、組み合わせの違いであることが分かる。二つの出来事のなかにそれぞれ動態助詞“着”がある場合も副次的な出来事と主要な出来事を表すと言えるであろう。

ところで、次の例（100）のように二つの同一動詞の後に動態助詞“着”を用い、一つの運動が長く行なわれることを表す場合もあるが、これは出来事が一つなので、本節の特殊文型のなかではなく、一般文型のなかで処理すべき問題なのであろう。

（100） 就这么走着走着，不知啥时候感到有一把伞在头上遮着。(4-8-96)

こんなふうに歩き続けているうちに、いつかしら頭上にかさがかかっているのを感じた。(同上)

4．5．特殊文型（～$_1$＋～$_2$＋～$_3$…）における動態助詞“着”の再分類

本節では三つ以上の出来事を有する特殊文型（～$_1$＋～$_2$＋～$_3$）に用いられている動態助詞“着”の用法を分析し、従来から言われている「連動文に用いる」や「相対的な時間を表す」という説の可否を検討してみよう。

（101） 老教授坐过来，微笑着问他干什么活，他说养木耳。(2-10-100)

教授が席を移ってきて、どんな仕事をしているのかと、にこやかに聞いた。(同上)

(102) 老孙头这时不知从哪里来的一股劲儿，竟然敏捷地一步跨上前去，伸出手臂抱住了奔跑中的小姑娘，紧接着抽身撤步。(1-5-91)

どこに一体こんな力がひそんでいたのか、孫老人はサッと足を一歩踏み出すと、手を伸ばして駆け去る女の子を抱え込んだのだ。そして、つかさず身をかわしてしりぞいた。(同上)

(103) 第二天常平又带来两条炸鱼，他要拨给鞠芳一条，鞠芳直躲着用手挡，一下子把鱼弄掉在桌子上。(2-6-98)

つぎの日、常平は魚のフライを二つ持ってきた。鞠さんに一つすすめようとしたが、手でふたをされて、魚は机の上に落ちてしまった。(2-6-99)

(104) "爸爸，给您烟！"我高举香烟欢叫着冲进门。(2-8-100)

「お父さん、ハイ、タバコ！」ボクはタバコを高くかざしてはしゃぎながらドアを入りました。(同上)

(105) 胖胖依然蹲在地上对着孙悟空发怔。(3-4-98)

胖胖はしゃがみこんだまま、ぼんやりと孫悟空をながめていた。(3-4-99)

(106) 我觍着脸随着众人不时举箸，把那肥鸡肉大鲤鱼挟过来塞在口中。(2-7-102)

私はもじもじしながら、ほかの人たちといっしょにせっせと箸を動かして、やわらかいとり肉や大きな鯉の身をはさんでは口におしこんだ。(同上)

(107) ……经常是一个月没到就把钱花光了，接着又死皮赖脸地缠着妈妈讨。(2-8-98)

……いつもひと月にならないうちにお金を全部使ってしまい、厚かましくうるさく母にねだるのです。(2-8-98 ～ 99)

(108) 她躺在床上吃着蛋糕看着电视。(作例)

彼女はベッドに横たわり、ケーキを食べたりテレビを見たりしています。

例（101）から（108）までは出来事が三つある場合である。出来事が三つある場合は前・中・後の出来事とそれぞれ呼ぶことにする。例（101）（102）（103）は前の出来事に動態助詞"着"が用いられている場合であり、前から順に「主体の進行」「主客の関係」「主体の進行」をそれぞれ表している。例（104）（105）は中の出来事に動態助詞"着"が用いられている場合であり、前者は「主体の進行」、後者は「主客の関係」を表している。例（106）（107）は前と中の出来事に動態助詞"着"が用いられている場合であり、例（106）の前者は「ことの進行」、後者は「主客の関係」を表し、例（107）の前者は「ことの関係」、後者は「主客の関係」を表している。例（108）は共に「ことの進行」を表している。これらの例文の文意からみると、一般には前と中の出来事は共に副次的な内容を表し、後の出来事は主要な内容を表していると言えるであろうが、例（108）は前の出来事が副次的な内容を表し、中と後の出来事は主要な内容を表していると言えるであろう。一つの文中に三つの出来事がある場合も副次的な出来事と主要な出来事を表すと言えるであろう。

5. おわりに

筆者の分析によれば、動態助詞“着”は上記［表3，4，5］に示すように、一般文型と特殊文型のなかに用いられる。どの文型のどの位置に用いられても、動態助詞“着”の機能は継続を表すことである。

一般文型の中に用いられる動態助詞“着”は出来事が一つしかないので、連語レベルでは「主要な運動の進行・持続・関係」を表す。二つの出来事を有する特殊文型のなかの連語レベルでは、前の出来事のなかに用いられると、前の出来事が後の出来事に対し、「副次的な運動の進行・持続・関係」を表す。後の出来事のなかに用いられると、「主要な運動の進行・持続・関係」を表す。三つの出来事を有する特殊文型のなかの動態助詞“着”は、連語レベルでは、前の出来事のなかに用いられると、前の出来事が後の出来事に対し、「副次的な運動の進行・持続・関係」を表す。なかの出来事は文意によって、「副次的な運動の進行・持続・関係」と「主要な運動の進行・持続・関係」を表す。後の出来事のなかに用いられると、「主要な運動の進行・持続・関係」を表すと言えるであろう。

このように動態助詞“着”は単語レベルでは継続を表すが、連語レベルでは一般文型と特殊文型のなかで「副次的な運動の進行・持続・関係」と「主要な運動の進行・持続・関係」とを表す。これらの点から、動態助詞“着”は一般文型のなかであっても特殊文型のなかであっても、単語レベルでは「継続」を表すが、連語レベルでは「運動の進行・持続・関係」を表すと言える。

注

1) 王学群（1999）では動態助詞“着”は継続（p.74）を表すとしている。

2) 呂叔湘（1992）のこの説は、動態助詞“着”の機能の説明ではなく、その前後の言語環境により、動態助詞“着”の用法を分類したものである。ここでは一般に呂叔湘氏の説がよく知られているので、動態助詞“着”を再分類するため、先行研究のなかから呂叔湘氏の説を選んでいる。侯学超（1998）も“着”について、“动态助词。表示进行或持续。”（p.736）と説明している。筆者も“着”を動態助詞とみなしている。この説に対し、张斌主編（2003）は“着”を時態助詞とみなし、“用在动词或形容词后边，表示时态。”（p.702）と説明している。

3) 高橋弥守彦（2004b）では動態助詞について、「動態助詞は運動を表す動詞や形容詞および運動に準じる内容を表す動詞や形容詞とだけ関係する」（p.171）と説明し、動態助詞は動詞だけでなく、形容詞の後にも用いられることを認めている。さらに、アスペクトについて「アスペクトとは運動内部の文法的な意味（機能）を表す表現であり、“起来”のようにどんなに虚化しても語彙的な意味を有する語句とは一線を画している」（p.172）と説明している。

4) 高橋弥守彦（2004b）では、「特殊文型の連述文のなかで、“跟（着），随（着），顺（着），沿（着），対（着）”が前の出来事のなかに用いられると、“跟（着），随（着），顺（着），沿（着）”は単独または客体とともに主体の方式の進行を表し、“对（着）”は主体の方式の持続を表す」（p.156）としている。

5) 高橋弥守彦（2004a）では、高橋弥守彦（2004b）を修正し、特殊文型の連述文のなかで、前の出来事のなかに用いられる“跟（着），随（着），顺（着），沿（着），对（着）”は副次的な運動の進行と持続とを表すとしている。

6) 《侯》には例文が挙げられていないので、『小』から取った。

7) 《侯》では例（29）の“向”を動詞としているが、おなじ文構造に用いる次の“向”は介詞としている。

他向我瞧了半天。（《侯》p.598）

彼はわたしを長いこと見つめていた。（筆者訳）

上記の例文は、例（29）のように“向”の後に“着”を用い、“他向着我瞧了半天。”とも言えるので、《侯》の“向”に対する分類には矛盾があるといわざるを得ないであろう。

8) 《张》では、ある一部の動詞は動態にも静態にも用いられるとし、次の例文を挙げている。しかし、筆者の区分では、これらは「ことの進行」と「主体の進行」とに別れる。

他们正开着机器呢。（動態：《张》p.703）

彼らはちょうど機械を動かしているところです。（筆者訳）

机器已经开着呢。（静態：《张》p.703）

機械はもう動いています。（筆者訳）

9) 黄慧英（2003）では例（35）のような「動詞＋“着”＋形容詞」構造を取り上げて論述している。

10) 『八』に「単独では用いられず、必ず趨向動詞を付けるか、前後に介詞句を付けねばならない」（p.128）という文法的な制約が挙げられている。二つの文法的な制約のうち、例（36）が前者、例（37）が後者に該当する文である。

11) 中西千香（2004）では「そこにみられる例文は、“跟”＋ヒト＋移動を表す動詞が主で，主体と対象の間には“前次后主（NP1 が従で NP2 が主）”の関係が見られる」（p.75）という指摘がある。

12) ここに挙げる“跟”の介詞としての四分類五用法は『八』（p.128）と《侯》（p.226~228）を参考にしている。なお、『八』では四分類（ⅰ.「共に」「一緒に」の意味を表す。例 44 ⅱ.動作と関係ある相手方を指す。例 41,42　ⅲ.ある事柄と関係があるかないかを表す。例 45,46　ⅳ.比較の対象をみちびく。例 43）であり、《侯》では三分類（ⅰ.共同作業を表す。例 45,46　ⅱ.一方が主体、もう一方がその対照を表す。例 41,42,44　ⅲ.比較の対象をみちびく。例 43）である。

13) 《张》では、次の二類を介詞の用法として挙げている（p.199）。この二類は『八』の相手との関係と比較の対象とを示す標識にあたる。

ⅰ．動作行為の対象を導入する。

昨天，老师跟我门讲了期终考试的问题。

昨日、先生は私たちに期末試験の問題を説明してくれた。（筆者訳）

ⅱ．比較の対象を導入し、双方が同じか異なるか、似ているか違うかを説明する。

北方的饮食习惯跟南方不一样。

北方の飲食は南方と習慣が異なる。(筆者訳)

14) 筆者の言う「対等関係」は、『八』では「対等の結合関係」と言っている (p.128)。

15) 高橋弥守彦 (2004a、2004b) では“跟着”を共に「動詞“跟”+動態助詞“着”」として扱っている。

16) 中西千香 (2004) では、筆者のいう「主客の関係」を表す“跟”について、「随伴義“跟”」と「移動しない随伴義“跟”」とに分けている。筆者の挙げる例文では例 (48) が中西の言う前者、例 (49) が後者に相当するであろう。

資料と例文

1) ショートショート (1988) 程枫等著, 人民中国杂志社, 1988.1 ～ 12

2) ショートショート (1989) 李玲等著, 人民中国杂志社, 1989.1 ～ 12

3) ショートショート (1990) 李敬寅等著, 人民中国杂志社, 1990.1 ～ 12

4) ショートショート (1991) 杨华敏等著, 人民中国杂志社, 1991.1 ～ 12

5) ショートショート (1993) 赵冬等著, 人民中国杂志社, 1993.1 ～ 12

6) ショートショート (1994) 凌鼎年等著, 人民中国杂志社, 1994.1 ～ 12

7) ショートショート (1995) 航鹰等著, 人民中国杂志社, 1995.1 ～ 12

8) ショートショート (1996) 关继尧等著, 人民中国杂志社, 1996.1 ～ 12

9) ショートショート (1997) 林如求等著, 人民中国杂志社, 1997.1 ～ 12

10) 中国語学講読シリーズ①～⑥ (1991) , 刘家林等著 , 柯森耀译 , 外文出版社

※例文の末尾に (9-2-87) と記してあれば、上記資料 12 の二冊目の 24 頁の意。上記に挙げた資料以外の引用例であれば、やはり例文末尾の括弧の中に資料名の略称と頁数が挙げてある。出典の記していない例文は、筆者が作例し、大東文化大学非常勤講師の鄭暁青・王学群・趙昕・鄭曙光の 4 先生が手を加えて下さったものである。また、中日対訳研究会月例会で発表した際には多くの先生方から貴重な意見を頂いた。ここに、あわせて感謝の意を表す。

主要参考文献

1. 相原茂　石田知子　戸沼市子 (1996) 『Why にこたえるはじめての中国語の文法書』 同学社

2. 荒川清秀 (2003) 『一歩進んだ中国語文法』 大修館書店

3. 王学群 (1999)「中国語の“V 着”について」『日中言語対照研究論集』創刊号　日中言語対照研究会編　白帝社

4. 王学群 (2004)「付帯状況を表す“V 着”について」『日中言語対照研究論集』第 6 号　日中対照言語学会編　白帝社

5. 王学群 (2005)「“V 着”のかたちの命令文再考」『日中言語対照研究論集』第 7 号　日中対照

言語学会編　白帝社
6. 曲阜师范大学本书编写组编著（1992）《现代汉语常用虚词词典》 浙江教育出版社
7. 侯学超编（1998）《现代汉语虚词词典》 北京大学出版社
8. 朱継征（2000）『中国語の動相』 白帝社
9. 朱德熙著　杉村博文・木村英樹訳（1995）『文法講義』 白帝社
10. 肖奚强（2004）〈“正（在）”“在”与“着”功能比较研究〉《第七届国际汉语教学讨论会论文选》北京大学出版社
11. 杉村博文（1994）『中国語文法教室』 大修館書店
12. 孙德金（2002）《汉语语法教程》 北京语言文化大学出版社
13. 高橋弥守彦（2004a）「“着”について」中国語教育学会第二回大会発表資料　2004 年 3 月 27 日
14. 高橋弥守彦（2004b）「中国語の“跟着”について」『21 世紀言語学研究』鈴木康之教授古希記念論集　04 記念行事委員会編　白帝社
15. 高橋弥守彦（2004c）「動態助詞“着”について」日中対照言語学会第 12 回大会発表資料 2004 年 12 月 23 日
16. 戴耀晶（1997）《现代汉语时体系统研究》 浙江教育出版社
17. 張岩紅（2005a）「特殊文型中における動態助詞“着”の機能について」『日中言語対照研究論集』第 7 号　白帝社
18. 張岩紅（2005b）「中国語のアスペクトをめぐって」『香坂順先生追悼記念論文集』香坂順先生追悼記念論文集編集委員会編　光生館
19. 張岩紅（2006）「“V_1 着 V_2”と“一边 V_1 一边 V_2”との関係について」『日中言語対照研究論集』第 8 号　白帝社
20. 张斌主编（2001）《现代汉语虚词词典》 商务印书馆
21. 陈月明（1999）〈时间副词“在”与“着”〉《汉语学习》第 4 期
22. 中西千香（2004）「“跟”について」中国語教育学会第二回大会発表資料　2004 年 3 月 27 日
23. 北京大学中国語言文学現代漢語教研室編　松岡榮志・古川裕監訳 『現代中国語総説』三省堂
24. 三宅登之（2005）「“一边 V1, 一边 V2”と“V1 着 V2”との関係について」『大東文化大学語学教育研究所創立 20 周年記念現代中国語文法研究論集』大東文化大学語学教育研究所
25. 守屋宏則（1995）『やさしくくわしい中国語文法の基礎』 東方書店
26. 李明浩（2005）「アスペクトとアスペクチュアリテイ」『外国語学研究』第 6 号　大東文化大学大学院外国語学研究科
27. 陆俭明　马真（1985）《现代汉语虚词散论》 北京大学出版社
28. 呂叔湘主編　牛島徳次《監訳》菱沼透訳 『中国語用例辞典』 東方書店